

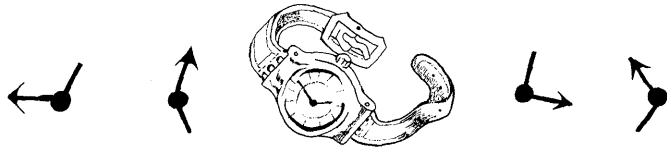
# 教育対談の前後

津守 真

ダニエル・ウオルシュとの出会い

半世紀にわたって、私がかかわってきた幼児たちが、大人になるのをみてきて、私は幼児期の大切さをますます痛感している。

今回、青山学院大学で行われた日本保育学会で教育対談をした米国の心理学者、ダニエル・ウオルシュと私を知り合ったのは、そんなことを考えているときだった。彼は、私の保育学の歩みに興味をもち、昨秋、私の兵庫教育大学付属幼稚園での講演前

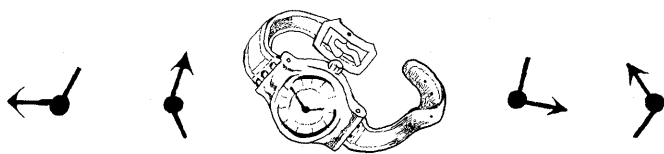


夜、ゲストハウスを訪ねてこられた。話すうちに、彼は心理学者であるけれども、幼児の生活を真剣に考えていることがじきに分かった。彼は、息子を通している日本の幼稚園を高く評価していた。その後、東京で愛育養護学校にも来られて半日を過ごされたが、その謙虚で丁寧な観察に私は印象づけられた。丁度たまたま、森上史朗先生から日本保育学会での講演のご依頼をうけた私は、ウオルシユと対談したら話に広がりができるのではないかと考え、それは現実の運びとなった。

### Eメールの交換

ウオルシユは間もなく米国の大学の大学に帰ったので、コンピューターのEメールを使って対談の準備をすることにした。昨年十二月からはじめて、ほぼ二週間ごとに交信し、かなりの長文にわたることもしばしばだった。私には初めての経験だったが、郵便局に出しにゆく必要もなく、両方に自動的にコピーが残るという現代技術の利点があった。

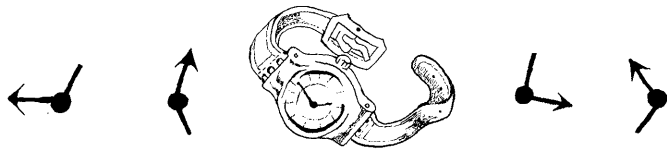
外国人との対談には、言語の問題がある。私共は、半年にわたって交換した意見のどの部分をどういう順序で提示するかについて、これもメールで打ち合わせをしてあった。それにしても、その場でのやりとりに価値がある対談での言語を考えると、頭がこんがらかってしまう。結局、用意した原稿はわきにおいて、互い在那場で臨



機応変に話すことにした。メールを通して相互の考えを理解し合っていたことがそれを可能にしたし、兵庫教育大学の鈴木正敏さんというウオルシュと親しい通訳者の助けも大きかった。メールの一部の翻訳を配布資料にし、参加した外国人のために英文資料も用意したことも私共の安心感となった。

### 保育の真価——日本からの発信

メールの往復のなかで、米国の幼稚園と日本の幼稚園との相違がしばしば話題になった。日本では、保育室と園庭との間を子どもは自由に出入りできる、園庭には子どもの冒険心に答える遊具がある、水を流して遊ぶ砂場がある、裏庭には大人から監視されることのない遊び場がある。それらは現代の米国では失われたものだとウオルシュは語った。半世紀前に私が米国に留学していたときには、米国の幼稚園では進歩主義教育が主流だったことを語ると、彼はそのとき自分は六歳だったと笑った。米国の幼児教育はこの間にどうしてそんなに変化してしまったのか。社会の多くの面で、米国で起こったことは十年、二十年後に日本でも起こるのが常であるとするならば、これは日本の幼稚園の未来図でもあるのか。そうだとすれば、現代、幼児教育は世界的な規模で危機にある。ウオルシュは、「日本は米国に学ぶものがいくつもあるだろうが、幼児教育についてはそうではない」と、語を強めて言った。日本の保育者は、



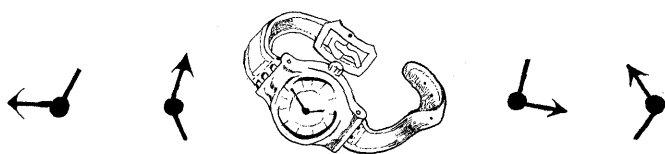
人間を育てる保育を世界に発信する時ではないか。「育てる心」こそが、現代に必要な「徳」であり、それを養うことがあらゆる段階での教育ではないか。

保育研究は子どもを生きやすくするために

メールの交換に当たって、ウオルシュの著書「文脈の中での子どもの研究―理論、方法、倫理」(M.Elizabeth Graue & Daniel J.Walsh, SAGE Publications, 1998) が郵送されてきた。私は『人間現象としての保育研究』(津守 真、本田和子編 増補版一九九八年 光生館)を一九七四年に出版して以来、米国の科学的心理学から意識して遠ざかっていたが、この書物を読んで、私がこの二十数年来やってきたのと同じ方向で考えている若い研究者が米国にもいることを知って心強く感じた。ウオルシュの著書の一部を私は本誌七月号に図書紹介として記した。「保育研究は、この世界を子どもにとって住みよい場所にするためのものである」。これは私共に共通の保育研究の前提である。

大人は子どもから生き方を学ぶ

保育学会を終えて後、ウオルシュは、再度、愛育養護学校を訪問し、母親との懇談会に参加された。ここは障害をもつ子どもの学校であるが、私共は障害に対する特別



の教育をしているのではなく、人間が生きやすくなるための保育をしている。このことをめぐって、ウォルシュは親たちにいろいろと質問し、親たちもこの保育の考えをたいせつに思っていることを、具体的に話した。そのひとつに、発作の話があった。発作も個人の身体の出来事であるだけでなく、生活全体のことである。子ども自身が自分の身体の変調に気づいてそれに備え、他の人もそれを日常のこととして、皆が過ごしやすくすればよい。そういう保育環境で生活していると、子どもは発作が始まる前に、「なんだか、へん」と言っ、大人に知らせ、自分からソファに横になる。この日も、その子は、他の子どもが発作を起こしそうになったのを見て、「この子、へん」と言っ、先生に知らせたのだった。自分らしく生きる日常生活の中で、子どもは全体状況を視野に入れて、自分の行動を自分できめる。そのとき発作も身体の変態だけではなく自分が生きる条件のひとつになる。

白状すると、教育対談の前日、私は不覚にも身体不調になり、倒れてしまった。当日の教育対談は多くの方々のお世話になりながら無事に終えることができたのは幸いだった。子どもたちは発作を起こしそうになると、自分で備えるのに、私はそれをできていない。子どもから生き方をしっかりと学びなおさなければいけませんねと私は皆から言われることになった。私もそう思う。